

介護保険が始まって今年で15年目。介護の社会化を目指したが、ここに来て国は「地域」で「在宅」でハンドルを大きく切った。核家族化が進み、介護を一人で担う家庭が増え、独居者も多くなっている。介護者になったり、介護を受ける身になったり、人ごとではない現実がある。

介護保険がスタートしたころ、認知症状の父親の介護をしていた。在宅でみた後、西宮市で介護を受ける本人や介護者、地域の人々が立場を超え、ご飯を食べながら思いを吐き出す場をつくった。12年間、多くの人たちと触れ合う中で、制度によって大きく変わったと感じることがある。

NPO法人「つどい場さくらちゃん」理事長

丸尾多重子

ビジネス化された介護保険

介護が「福祉」から「産業」へと変わり、家族のお任せ体質に拍車がかかった。かつて介護は家族が引き受けるしかなく、在宅介護は当たり前だった。それを支えるシステムもあった。脳疾患などで入院すれば、在宅で生活できるよう、日数をかけて本人や介護者に

リハビリを指導した。それでも無理なら、介護老人保健施設(老健)で3カ月ほど在宅復帰のためのリハビリを行った。保健師が家族のサポートに自宅を訪れていた。ところが制度が始まると、ケアマネジャーが誕生し、介護を受ける本人の思いよりも家族の意向を

見る 思う



重視する「計算屋」となった。中には良い施設はあるが、職員の手配に時間と力ネをかけず、介護を単なる作業に終わらせている経営者も多い。収入源が介護保険料という特殊な業界に、企業努力などの危機感も感じられない。一方、街中や自宅から高齢者が消えた。昔は近所の公園などにおしゃべりなお年寄りがたくさん

いた。制度が始まると、朝夕に送迎車が街中を走り回り、お年寄りを運び去る。安全・安心をうたう施設に送り込まれ、自力で歩ける人も転倒を恐れて車いすに乗せられる。自由はほとんどない。つどい場では当初から、定期的な高齢者や介護者、介護・医療関係者で旅行に出掛けている。介護を受けていても普通に電車に乗り、お店で食事を楽しむ。さりげないサポートさえあれば、みんな笑顔になれる。人生設計の中に、介護者になる

まるお・たえこ 大阪市生まれ。OJを経て、東京で食関係の仕事に就く。その後実家に戻り、10年間、父母と兄を在宅介護。介護現場の実態を知つてつどい場を設立。ボランティアに支えられ介護者の孤立を防いでいる。

ことや介護を受けることを想定している人がどれほどいるのだろう。認知症や脳卒中、がん、交通事故など隣り合わせで生きている。一人では生きていけない。たとき、サポートしてくれるのは人しかない。ネット社会にあつてマニュアル化できないのが介護や医療の世界だ。個性や工夫が求められるはずだが、ビジネス化された介護保険は福祉を萎縮させた。地域や家族関係を断ち切り、心ある介護職をも減らしている。制度は一体、誰を幸せにしたのか。逃げずに付き合えば、介護こそ人生そのものだ。と分かるはずなのに。